の中で、日蓮の言うこと、即ち法華経の教えは、「未来日本国当世をうつし給える明鏡なり。かたみとも見るべし。」と仰有っています。お題目総弘通とは、日蓮聖人の遺言を守り、実行することではありませんか。

修法師の行証

山口　徹修
（大阪府本行寺住職）

大阪と京都という大都会の狭間に、大阪三島という日蓮宗にとっては離れ小島のような感じの小さな管区があります。その三島に、はぐれ鳥が一羽住んでおりまして、それが私であると、自分でそんな風に考えております。

はぐれ鳥といいますと、すね者のような感じがしますが、なかなかどうしてそんなものではなくて、自由で自在で、しかも遊戯神通なのです。なぜはぐれ鳥かといいますと、師匠の寺を継いで今年で十一年になるのですが、全く十年一日の如く、朝八時に寺を出ますと、寝ぐらに帰って来るのが夕暮れか夜です。こういう生活が毎日続いて、不特定の人の間を通り過ぎることが多いことから、自分ではぐれ鳥のような気がしてくるのです。

しかし、修法師というものは、木剣をふところにねじ込んでふらりと出かけると、一週間でも一カ月でも、例え何処に居ても不自由を感じない者でなければならんと、先輩に聞いたことがあります。そういう観点から見ますと、私の日頃の生活の風景もまんざらではないかと、自分一人で悦に入っております。

「蘆花白牛にかくれる」という言葉があります。蘆（あし）の花というものは、一面を白い花でおゝい尽すそうです。その白い花の処に白い牛がやって来て、見分けがつかなくなる様子なのですが、一面の白い花が白牛を隠すのではなく、白牛が蘆の花の白さを消してしまうという表現なのです。

鎌倉仏教の天才的な祖師の方々は、権威主義と形式主義に染った、あの比叡山を下りて来られて、衆生の中に自分も一人の衆生としてお立ちになって、一切衆生を包

の中で、日蓮の言うこと、即ち法華経の教えは、「未来日本国当世をうつし給える明鏡なり。かたみとも見るべし。」と仰有っています。お題目総弘通とは、日蓮聖人の遺言を守り、実行することではありませんか。

修法師の行証

山口　徹修
（大阪府本行寺住職）

大阪と京都という大都会の狭間に、大阪三島という日蓮宗にとっては離れ小島のような感じの小さな管区があります。その三島に、はぐれ鳥が一羽住んでおりまして、それが私であると、自分でそんな風に考えております。

はぐれ鳥といいますと、すね者のような感じがしますが、なかなかどうしてそんなものではなくて、自由で自在で、しかも遊戯神通なのです。なぜはぐれ鳥かといいますと、師匠の寺を継いで今年で十一年になるのですが、全く十年一日の如く、朝八時に寺を出ますと、寝ぐらに帰って来るのが夕暮れか夜です。こういう生活が毎日続いて、不特定の人の間を通り過ぎることが多いことから、自分ではぐれ鳥のような気がしてくるのです。

しかし、修法師というものは、木剣をふところにねじ込んでふらりと出かけると、一週間でも一カ月でも、例え何処に居ても不自由を感じない者でなければならんと、先輩に聞いたことがあります。そういう観点から見ますと、私の日頃の生活の風景もまんざらではないかと、自分一人で悦に入っております。

「蘆花白牛にかくれる」という言葉があります。蘆（あし）の花というものは、一面を白い花でおゝい尽すそうです。その白い花の処に白い牛がやって来て、見分けがつかなくなる様子なのですが、一面の白い花が白牛を隠すのではなく、白牛が蘆の花の白さを消してしまうという表現なのです。

鎌倉仏教の天才的な祖師の方々は、権威主義と形式主義に染った、あの比叡山を下りて来られて、衆生の中に自分も一人の衆生としてお立ちになって、一切衆生を包

んでゆかれたさまは、まさに「蘆花白牛にかくれる」の意味あいを彷彿とさせるものです。理想的なお坊さんのさまは、そんな風光であろうという考えが、私の頭の根底にございます。

そのことを知っていただいて、私の「修法師としての行証」という話を、聞いていただきたいと思います。仏教の話ですから、「教」「行」「証」と話が進んで行くべきなのですが、今日は時間の関係で、私の修法道の「行」の話から入ります。

私が修法師の道を選んだのは、理由が三つあります。

一つは、私のおります寺が、御祈禱をする機会が非常に多くて、祈禱をする資格が欲しかったことが第一の理由です。正直申し上げますと、このことだけが理由の大部分を占めていたのは事実です。

今一つは、私は小さい時、ドモッておりまして、人の前で話すことが非常に苦痛でした。だからお坊さんになるなら、なるべく人の前で話をすることの少ない修法師になった方がいいと、常々考えておりました。

もう一つの理由は、これは上手にお話が出来ないことから来る負け惜しみ以外の何物でもないのですが、人間というものは、生活をしてゆかなければならないという、ドロドロとした見にくいシッポを常にぶらさげているものですから、どんなに上手に完全な話をしても、それはきっと自分自身にとって、空しさの残るものであると考えておりました。「初めに言葉あり」とはいいますが、究極的には人間の救いというものは、言葉の世界にはないと考えていた訳です。

だから、表現能力を言葉に持たなかった自分は、身体で行動でものをいう以外になかったのです。

そんな理由で、荒行に入ったのでした。

よく、方角違いだとからかわれますが、法律学を勉強して、そのまま会社に勤め、全く普通の生活から二十九才の時に入行したものですから、荒行堂の生活に全く面食らいました。こんな処が存在していたのかと、びっくりしたのを忘れることが出来ません。だから非常に苦しんで、百日間を悪戦苦闘で過ごしました。

出行の時に迎えに来てくれた父に、「実の子をよくこんな処に入れたなあ」と、吐いて捨てるようにいったもの

です。思い返して、バチ当りな事をいったものだと、今でも胸の痛みを覚える次第です。

師匠は入行する時に、「俺とお前は師匠と弟子ということになっているが、所詮は親子でしかなかろう。荒行に入って、お前が一生懸命修行をしたら、きっと修行僧の中でこの人は本物だなという人が見えて来るようになる。自分の周囲に、自分の手本となるような人に会えたら、お前の修行は成功したことになるだろう。本物だなという人を師として、目標としてやれよ」といっておられたのですが、この言葉をまともにとらえたのは、出行して随分日数が経てからのことでした。

師ということに関しては、行中も先輩より「師厳道尊」という言葉をいやという程聞くのですが、これは言葉としては私の好きな言葉なのですが、品性の悪い先輩に限って、自分のエゴを押しつける目的で引用するものですから、すっかりなじめなくなってしまいます。行から出て修法師として実践に入って、修法布教の経験をつんでいるうちに、どうしてもぶつかるのが、自分自身の不十分さと同時に、師の問題であろうと思います。まして私のように、修法師としての資格だけが欲しいというような不届きな心得をしていた者にとっては、なおさらです。これは間違いであったなと気付きまして、自分の師を求めて一よりやり直さなければならないと、痛感するようになります。

これは修法布教の実践経験が、私に教えてくれたものなのです。

「正師を得ずんば学ばざるにしかず」と唱破する道元禅師の言葉ではありませんが、正しい師に出会わなかったら、本当に学ばない方がましなのです。その師は自分の志す道の中で、自分の心のあり方によって、必ず出会うものなのだと、私は確心しております。

それから、修法布教の実際を経験しておりますと、自分が今まで修法に関して誤解していたことなどに、気付き始めることが多いのです。

一つ二つ例をあげますと、例えば、ロイという、いわゆる口伝につきましても、先輩がいかにも自分だけがその内容を知っていて、おいそれとは教えられない大切な秘密があるような感じです。しかし、そんな安っぽいも

のはなく、此の処は応用問題のようなもので、場合に応じての方法がある処なのだという、先師の慈悲の声だということが解って来ます。

又、験者である私がこんなことをいうとおかしいかも知れませんが、寄り加持や、霊媒・霊感という言葉にかくれて、あり得ないことをいかにも見えたようなことをいう人は、私はゾッとする程嫌いなのです。だから、そういう人に目をそむけることにしているのですが、ところが、一旦そんな人に集る信者の方に目を向けると、アッーと驚くようなことに気が付くのです。

信者というものは、自分の持っている本当の悩みや、自分の本心というものを、立派な衣を着て、良識然としているお坊さんには決して話しませんが、霊媒の人や占いの人には、真実を語り、心を開くという事実があるのです。

仏教には、キリスト教のように懺悔の習慣を上手に使っておりません。だから、九星にしても、霊媒にしても、占いにしても、信者の本心へのアプローチとしては、こういうものにたよらざるを得なかったと思うのです。

結論としていえることは、布教をするためにはどんなことがあっても、信者と苦楽を共に感じ合えるという共感と、共業というものを分ち合うものがなければ、駄目だということです。そしてもう一つは、お坊さんと信者が、立場を同じにする同時行ということがなければ、その布教は意味をなさないということです。お坊さんと信者さんが、一人一人の心の奥底から共感するものを感じ合い、人間として同じ立場に立って布教に当らないと、本当の宗教の布教は絶対にないと思うのです。

そういう結論をふまえて、日蓮大聖人の祈禱の原点というものを考えてみますと、祈禱は信ずるということと、真実の教えということと、祈禱する師ということが大切で、この三者がそろって始めて法華経の行者の祈りが叶ってゆくことになります。ここでいうところの師は、法器ということなのでしょうが、広い意味では「師ありてこそ修法あり」ということには違いないのです。

そんな風な考えと共に、師を求め法器となるためには、私の初行の時のように資格を取りに行くような行ではだめで、自ら進んで志を新らたにし、求道の修行を志すべ

きだと思い、再行に行くことにしました。

再行に入って、まずやり始めたことは、同行の方の指導を受けまして、十一時の最後の水行の最終の水をかぶるということを続けました。十一時五十分を過ぎて水行場に入り、暗くそゝり立つ鷹取山に向って、水行肝文を唱えて水をかぶります。そして、十二時の消灯と共に、暗くて長い廊下を行僧寮の方に下りて来るのです。それをずっと続けていて、ある日、私はふと今でもこんなに深閑として寂しい山中であるのに、日蓮大聖人御在世の頃はどんなであったろうと想像してみて、背筋がゾッとしたことがあるのです。と同時にこんな山深く籠られた日蓮大聖人の心境は、どんなものであったのだろうか。何故この山に籠ってしまわれたのだろうか、という疑問にとりつかれてしまうのです。

一つ一つの説を思い出してみると、それはそれらしく思えるのですが、どうももう一つ自分としては、納得のゆかないものに出会うのです。別にそれを調べてはっきりしたいと思う気持もないのですが、只何時の間にか思いがそこに走って行って、直感的に空想をめぐらしているのです。たわいのない空想を遊んでいるにしか過ぎないのですが、とにかく、いろいろの説が私を悩し続けるのです。勿論、こんなことは、誰にも話したこともないのですが、思いついた結論だけは語っておかないと、その後の私の荒行の求める方向づけが出て来ないので恥しい思いもしますが、お話しすることにします。すぐ忘れて下さい。

私が再行の時に、霊感でとらえた日蓮大聖人の身延山御入山予想図ともいうべきは、次の様になっています。

「三度国を諫めんに、もちいずば国を去るべし」とか、「一人になりて、日本国を流浪する身」とかのお言葉から来る挫折感をいだいて、身延山に入山されたという様子は、私にはとても考えられないことなのです。これとは全く反対で実は日蓮聖人は御謝免になられて、佐渡から鎌倉までの経過の中で、御自身ははっきりと、日本国が自分を必要とし、法華経を必要としていることを確実な事実として、とらえられたのだと思うのです。幕府は鎌倉において、日蓮聖人の言葉を取り上げはしなかったけれど、その忠告を聞かねばならぬ時期が必ず現実のも

のとなって来ると確心されたのだと思うのです。それまでは、その時期を待つべきであり、待つべき処が縁あって身延山となったのだと、結論づけたのです。

要するに、本門の戒壇が生まれるまで待つべき山が、身延山であったのです。

ということは、丁度、奈良仏教の戒壇院に抵抗して、比叡山に籠られた伝教大師が、十三年の籠山の後、叡山戒壇院の実現を獲得されたコースが、私には偲ばれたのです。いざといった時の人間の行動は、ふるさとからやって来るか、自分の学んだところから、その示唆がおとずれると思うのです。

叡山十三年の籠山の伝教大師を偲んで、現在でも比叡山では十三年の籠山行が続いています。こう考えた時、私も身延山九カ年の大聖人の籠山を偲んで、九百日の行にいどもうと思い立つのです。

しかし、九カ年まるまるの籠山ということは、余程のエリートか、金持ちか、身延山に永住の地を持つしかない訳ですから、一年を百日に凝縮して、九百日の荒行を満行と目指して修行をしようと決めた。それは決して名誉を求めるのではないから、阿闍利と呼ばれる千日行は、止そうと決心するのです。

そうすることによって、必ず私の僧としての生き方を、大聖人から直接に学ぶことが出来ると直感したのです。

だから、その翌年には参行に入り、二年後には四行、一年の間隔を置いて五行と、規則が許す限りにおいて、身延山の行堂に入行しました。ところが、五行を出た年に、行堂の一本化ということで身延山の荒行はなくなってしまうのです。

これは、私には大きなショックでして、全く目標を失ってしまうのです。

しかしその直後、私の身の上に大きな変化が起りまして、父が倒れて父の住職していた寺に帰らなければならなくなったことと、私自身がバージャー氏病という、足に血栓を起す難病にかかって、非常に苦しむのです。だから寺の事情からも、自分の病状からも、とても修行を続けられる状態ではなかったのです。従って荒行堂が、例え身延山にそのままあったとしても、挫折をよぎなくされていたのです。

そのような訳で、最初に申しましたように、はぐれ鳥のような生活が始まるのです。私が現在の寺の住職をして、先代と変ったのは何処かと尋ねられますと、別に何もないのです。時の流れに身をまかせているだけで、寺の習慣に従って、流れに添って下って来たのですが、たった一つだけやり方を変えたことがございます。

寺の年中行事で、毎月の一日祭と十二日毎の午の日の妙見祭・土用行の百万辺の唱題行・大黒祭・御難会等の行事を信行会形式にして、参加者の計画と工夫で行事を改革してゆきました。

それに参加する私も、祈禱をしたりお話をしたり、座談会をしたり、やれといわれることは何でもするのですが、私も信者の一人として、皆さんと同じようにお布施を出して行事に参加しております。そして、私はセールスマンよろしく、毎日檀家廻りをしながら、行事への参加を呼びかけております。

そんな私達の信行会なのですが、大きな布教の効果を上げ得たとは、決して思ってはおりません。しかし、そんなささやかな運動の中から、住職十年目の記念事業にと、皆さんの協力で小さな塔を建てることが出来ました。

次の日は、その次の日に似ているという具合で、十年一日のような生活が続いて来たわけですから、過ごした十年のように、来るべき十年も同じように終ることだと思います。そんな私なんですが、私の心の中に常に離れずに気がかりになっていることは、これからの世の中が、どのようになって行くのだろうか、宗教や宗門の流れはどのような様子で、二十一世紀を迎えてゆくのだろうかということなのです。

私などは、科学さえ発展すれば、人類は救われるというような科学信仰ともいうべき教育を受けて来た人間なのですが、何だかこんなはずではなかったと感じながら、迎えている世紀末であると思うのです。

今、人間の世界をじっと見ていると、日毎に何もかもが人工的になって行っております。あまりにも急速に科学が発展をとげてゆくものですから、これでは人々が自然にもっている能力や、思考力を越えてしまうのではないかと心配です。そして、科学が宗教を語る時代を迎えたとさえ、いわれております。そして、それが現実のも

のとなって来ております。

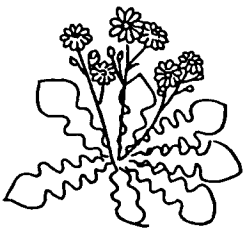
しかし、科学が語る宗教の世界が、そのまま我々が修行を通して目指してきた境地であるのか、これは人間にとって深刻な問題だといわねばなりません。

私自身はこう考えております。例えどんな時代が来たとしても、科学の側からでも、宗学の側からでも、語り尽したとしても、そんなことに全然かかわりなく、毎日、その日を唱題修行し続けるきびしい姿勢の仏道修行こそが、激動する現実に、柔軟な対応する力を生み出すものと考えております。

激動する社会の変化に対応する能力の根源は、ひたむきな仏道修行であると結論づけて、私の研究発表を終りたく思います。

只、最後にこれからの宗教界に望むことを申し述べさせて戴くとするならば、宗教というものが、自我を捨てて願いに生きるものである限り、個人が殺した一人一人の自我を、集団の自我にすりかえて利用するような真似を、絶対にして欲しくないということなのです。

そうした宗教者の行為は、宗教者自身が宗教の首をしめる行為であるといわざるを得ないからです。



第二十回中央教化研究会議

一、開催趣旨

(1) 記念すべき第二十回中央教化研究会議を迎え、会議のより一層の充実をはかり、教師の連帯を高め、日蓮一門づくりを推進する原動力となろう。

(2) お題目総弘通運動の徹底とその浸透をめざし、開宗七五〇年に向けての宗徒の進むべき道について語り、その方策を考えよう。

(3) 現代に対応する信行活動と信行会づくりに励み、二十一世紀をリードする宗門体制を確立しよう。

(4) 宗教と社会、祖願と現代について考え、浄仏国土顕現の具現化をはかろう。

(5) 中央教研と地方教研の今後のあり方を検討し、中央教化センターと地方教化センターづくりを推進しよう。

二、統一テーマ

——現代に生きる宗門づくりとお題目総弘通運動を語ろう——

三、会議形式

(1) 全体会議

——記念講演——現代における布教とは

長谷川正徳（前現代宗教研究所所長・顧問）

(2) 分科会及びテーマ

○第1分科会〈教学部会〉

お題目総弘通運動のための教学の現代化、その徹底について語りあおう。

○第2分科会〈寺檀部会〉
お題目総弘通運動に対応する寺院と檀信徒のあり方、及び未信徒教化について語りあおう。（特に信行会について）
○第3分科会〈法器養成部会〉
お題目総弘通運動を担う未来の法器養成について語りあおう。（信行道場・加行所・勧学院）
○第4分科会〈世代別教化部会〉
お題目総弘通運動による宗徒の若返り策と、世代別教化の活力化について語りあおう。（青少年修養道場・林間学校）
○第5分科会〈教化伝道部会〉
お題目総弘通運動を推進する教化伝道の方法について語りあおう。（教箋・ポスター・テレフォン説教・視聴覚伝道・掲示板）
○第6分科会〈社会問題部会〉
お題目総弘通運動と社会諸問題との接点をさぐり運動の展開方法を語りあおう。（医療・福祉・過疎過密問題・立正平和運動）
○第7分科会〈教化組織部会〉
お題目総弘通運動の全国的・地域的連帯と地域の活性化について語りあおう。（人材バンク・ネットワークづくり・中央教化センター・地方教化センター）

四、討議方式

(1) 各分科会とも最初に統一テーマについて討議する。
(2) 各分科会のテーマにもとづき討議する。

(3) 「お題目総弘通運動第一期六カ年計画」を基礎に部会方針としてまとめる。

五、会　場　池上本門寺・朗峰会館

六、宿　舎　品川ホテルパシフィック

七、参加者　宗務所長よりの推挙委嘱された運営委員（管区三名）

八、持参品　○数珠・折五条・布教服・筆記具・洗面具　○「お題目総弘通運動」Ⅰ(1)（宗務院刊）　○「現代宗教研究二十一号」（配布済）　○各自発行の教化資料

九、日　程

◎第一日目　九月九日（水）

受　付　午前九時～九時三十分（朗峰会館）

開会式　午前九時三十分～十時（本殿）

記念講演　午前十時～十一時（本殿）

分科会　午前十一時～十二時三十分（指定会場）

昼　食　午後十二時三十分～一時（指定会場）

分科会　午後一時～五時（指定会場）

懇親会　午後五時十五分～六時四十五分（朗峰会館）

移　動　午後七時（ホテルへバス移動）

◎第二日目　九月十日（木）

朝　食　午前七時三十分

移　動　午前八時三十分（朗峰会館へバス移動）

全体会議　午前九時～十二時パネルディスカッション（朗峰会館）
教区別懇談会　午後十二時～一時三十分（昼食）（指定会場）
誓願唱題行　午後一時三十分～二時（本殿）
閉会式　午後二時～二時三十分（本殿）

全体会議・分科会役配分担

○全体会議座長　中村潤一師

○分科会（敬称略）

	座長	助言者	発題者	運営・記録
1	原　顕彰	井藤　太然	木村　勝行	秋永　智徳・片野　博義
2	新井　貫厚	石井　錬昭	三原　正資	井村　大祐・大島　啓禎
3	太田　鳳苑	菊池　泰瑞	新間　智照	岩永　泰賢・鈴木　浄元
4	都　龍張	鎌田　行学	古河　良晧	鈴木　国守・本良　信典
5	豊田　正通	神谷　行宏	龍澤　泰孝	渡部　公容・常岡　裕道
6	小川　順道	石田　良正	久住　謙是	渡辺　義伸・山口　裕光
7	小倉　光雄	井本　学雄	伊藤　立教	吉橋　勝寛・嶋田　堯嗣
		顧問		
		研宗		
		現		

○懇親会司会者　新井貫厚師

教区教研運営委員の役割

宗務所長の推挙にてえらばれた教区教化研究会議の運営委員（宗務所長任期に同じ）の仕事は、おおよそ次の通りです。

一、中央教化研究会議の企画・運営及びその参加。

二、教区の教化研究会議運営に際しては、中央教化研究会議での議題を持ち帰り、教区長・宗務所長及び教区内の現代宗教研究所顧問・嘱託・研究員等と協議し、企画・運営等を推進する。

三、教区教化研究会議にて協議検討された結果をまとめ、書面にて現代宗教研究所へ報告し、これをもって次年度の中央教化研究会議のための検討資料とする。

四、教化資料の収集、及び教化研究会議にて検討された課題への持続的な取組みを図る。

五、地域教化センター設置を推進し参加する。

六、日蓮宗教化センター（中央）設立をめざす。